

関西圏地盤情報データベース研究利用報告書

研究課題	大阪堆積盆地の速度構造モデルの構築		
研究者	京都大学防災研究所 関口春子		
研究期間	令和 2 年 9 月 ~ 令和 3 年 9 月	報告日	令和 3 年 10 月 8 日
<p>研究目的：</p> <p>平成 22~24 年度に実施された文部科学省委託研究「上町断層帯における重点的な調査観測（以降、上町重点調査）」において、大阪盆地堆積層の 3 次元地震波速度構造モデルを作成したが、この際、モデルに組み込めなかったデータを追加し、モデル化作業の微修正を行ってモデルを完成させる。</p> <p>研究内容と成果：</p> <p>上町重点調査で作成した 3 次元地震波速度構造モデルは、堆積層中の複数の鍵層の深度分布のモデル化が基本になっている。最も堆積年代の新しい鍵層である Ma10 層は、反射法地震探査の解釈断面で推定深度が与えられていないこともあるが、地震動応答の観点からは、浅部の構造ほど影響が大きく精度が求められる。そこで、これまでのモデル化で用いてこなかった浅層ボーリングデータに多く含まれる Ma12 層の深度データを利用し、Ma10 層深度を推定することを考えた。</p> <p>今研究期間以前の研究において、近い地点で得られている Ma12, Ma10 の鍵層深度の計測値から、それらの間の深度比を計算してその分布モデルを作成した。Ma12/Ma10 深度比分布は、大阪平野内でも近距離で大きく変化することもあり、一律に空間的に内挿した値を用いるべきではないこともわかった。</p> <p>そこで、今研究期間では、完新世における堆積環境の違いなどを考慮しつつ、可能な限りこの Ma12/Ma10 深度比分布を補助データとして用いて Ma10 深度モデルを作成した。また、Ma12 層も 3 次元速度構造モデルの鍵層として用いることにより、浅部のモデル化精度を上げることを試みた。</p> <p>公開資料（論文等）：</p>			

※貸出期間終了後、研究利用報告書（本様式）と研究成果（論文等）を提出してください。
 ※研究利用報告書は、KG-NET の HP で公開します。